

日蓮大聖人御書全集

つきまろごぜんごしよ

月満御前御書

新版
1511
）
1512

つきまるごぜんごしよ

月満御前御書

ぶんえい ねん がつ にち さい しじようきんご

文永 8 年 (71) 5 月 8 日 50 歳 四条金吾

わらわべう たま よしうけたまわ そうろう おぼ そうろう

若童生まれさせ給いし由 承り候。めでたく覚え候。

こと きよう ようか そうろう かれ しょうがん 潮

殊に今日は八日にて候。彼といい、これといい、所願しお

さ はる の はな ひら

の指すがごとく、春の野に花の開けるがごとし。しかれば、

急 な たてまつ つきまるごぜん もう

いそぎいそぎ名をつけ奉る。月満御前と申すべし。

うえ くに しゆ はちまんだいぼさつ うづきようか 生

その上、この国の主・八幡大菩薩は卯月八日に生まれさ

たも しゃばせかい きようしゆ しゃくそん うづきようか ごたんじよう

せ給う。娑婆世界の教主・釈尊もまた卯月八日に御誕生な

いま わらわめ つき か ようか たも

りき。今の童女、また月は替われども八日に生まれ給う。

しやくそん はちまん

か もう

にちれん ほんぷ

釈尊・八幡のうまれ替わりとや申さん。日蓮は凡夫なれば

よ し 能くは知らず。これしかしながら、日蓮が符を進らせし故な

り。さこそ父母も悦び給うらん。

ふぼ よろこ たも

殊に御祝いとして餅・酒・鳥目一貫文、送り給ひ候い

こと おんいわ もちい さけ ちようもくいつかんもん おく た そうら

畢わんぬ。これまた御本尊・十羅刹に申し上げて候。今日

お ごほんぞん じゆうらせつ もう あ そうろう こんにち

の仏、生まれさせまします時に、三十二の不思議あり。こ

ほとけ う とき さんじゆうに ふしぎ

のこと周書異記という文にしるし置けり。

しゆうしよいき ふみ 記 お

釈迦仏は誕生し給いて七歩し、口を自ら開いて「天上

しゃかぶつ たんじよう たま しちほ ぐち みずか ひら てんじよう

天下、唯我独尊。三界皆苦。我当度之（天上・天下、ただ

てんげ ゆいがどくそん さんがいかいく がとうどし てんじよう てんげ

天下、唯我独尊。三界皆苦。我当度之（天上・天下、ただ

われ ひと たつと さんがい みなく われまさ

我のみ独り尊し。三界は皆苦なり。我当にこれを度すべし」

じゅうろくじ とな たも いま つきまろごぜん たま

の十六字を唱え給う。今の月満御前は、うまれ給いて

産 声 なんみようほうれんげきよう とな たも ほけきよう い

うぶごえに南無妙法蓮華経と唱え給うか。法華経に云わく

しよほうじつそう てんだい い こえ ぶつじ どううんぬん にちれん

「諸法実相」。天台云わく「声、仏事をなす」等云々。日蓮ま

すい たてまつ

たかくのごとく推し奉る。

たと いかずち おと みみ 癡 き にちがつ

譬えば、雷の音、耳しいのために聞くことなく、日月の

ひかり め 暗 み さだ じゅうらせつによ よ

光、目くらのために見ることなし。定めて十羅刹女は寄り

あ 産 みず 撫 やしな たも

合つてうぶ水をなで養い給うらん。あらめでたや、あらめ

おんよろこ すいりようもう そうろう じゅうらせつによ

でたや。御悦び推量申し候。ねんごろに十羅刹女・

てんしょうだいじんとう

もう

そうろう

そうろう

天照太神等にも申して候。あまりのことに候あいだ、

くわ

もう

かさ

もう

そうろう

委しくは申さず。これより重ねて申すべく候。あなかし

こ、あなかしこ。

しじょうきんごどのごへんじ

四条金吾殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押